

# 高等学校地理における 授業のユニバーサルデザイン

— 知識の習得と活用を目的として —

学籍番号 179969

氏名 植松 寿行

主指導教員 庭山 和貴

## 1. 実践研究の背景

子どもの多様性・特別なニーズのある子どもが増している中で、高等学校においても、誰にでもわかりやすい授業が求められている。実際、高等学校では、平成30年度から通級で特別な支援が必要な子どもを指導できるようになった。また、変化の激しい社会や知識基盤社会といわれている中で、学校教育では知識の習得およびそれを「活用する力」の育成が求められている。本実践研究を実施した実習校においても、個に応じた教育をすることにより、基礎学力の充実、応用的学力（＝活用力）の育成の実施が目指されている。そのため、先行研究の動向などを踏まえて、本研究では、日本授業UD学会が提唱している「授業のユニバーサルデザイン」を取り入れた。授業のユニバーサルデザイン（以下、授業のUD）とは、特別な支援が必要な子どもを含めて、通常学級の全員の子どもが、楽しく学び合い「わかる・できる」ことを目指す授業デザインである。授業のUDを実現するために、「焦点化」「視覚化」などの14の視点が示されている。

以上より、本研究では、日本授業UD学会が提唱している「授業のユニバーサルデザイン」を取り入れ、高等学校地理における知識の習得と活用を目指した。

## 2. 実践研究

### 2.1 実践研究 I

実践研究 I では、授業のUDの視点を取り入れた学習指導（単元：中国の生活・文化）の工夫と効果の検証・考察を行った。授業前後の単元テストの平均得点を比較したところ、授業後の単元テストの平均得点が有意に上昇しており、授業のUDの視点を取り入れることが知識の習得と活用に有効であることを示すことができた。しかし、生徒の学習面に関する実態把握と授業のUDの「スモールステップ化・視覚化・共有化」の視点に課題が残った。

## 2.2 実践研究Ⅱ

実践研究Ⅱでは、まず授業担当教員からのヒアリングや中学校までの既習知識を把握するテスト（以下、予備テスト）から生徒の学習面に関する実態把握を行い、学力が困難な生徒達を B 群、それ以外の生徒達を A 群と分けた。さらに生徒の実態をもとに、授業の UD の 3 つの視点である「スモールステップ化・視覚化・共有化」を取り入れた学習指導（単元：人々の生活と地形）の工夫を行い、その効果の検証・考察を行った。授業後の単元テストより、B 群の生徒達が A 群の生徒達と同等に本単元の知識を習得し、活用もできたこと示す結果となった。しかし、授業後の単元テストの高得点者の少なさと A、B 群間での地形名称の習得状況の差があるという課題が残った。

## 2.3 実践研究Ⅲ

実践研究Ⅲでは、実践研究Ⅱと同様の手続きで授業を設計し、学習指導（単元：中国の生活・文化）の工夫と効果の検証・考察を行った。ただし、実践研究Ⅱに加えて、B 群の生徒達を中心とした個別支援などの活動を行った。授業後の単元テストより、本単元の活用に関する問題において、B 群の生徒達が A 群の生徒達と同等に知識を活用できたことを示す結果となった。しかし、知識の習得に関する問題において B 群と A 群間で差があるという課題が残った。また、実践研究Ⅲと実践研究Ⅰは、同じ単元であったため、授業後の単元テストの得点について比較を行った。実践研究Ⅲの対象は実践研究Ⅰの生徒とは学年が違うが、同じ高等学校であるため、学力は同等と仮定した。比較の結果、実践研究Ⅲの方が実践研究Ⅰよりも知識を習得することができていた。

# 3. 総合考察

3 つの実践研究の結果より、高等学校地理において授業の UD の視点を取り入れた授業をすることは、知識の習得と活用に効果的であることが示された。また、学力が困難な生徒達である B 群が、それ以外の生徒達である A 群と同等に学んだ知識の活用をできたことも示された。平成 30 年度から高等学校において通級で特別な支援が必要な子どもを指導できるなど、高等学校においても子どもの教育的ニーズに応じた教育が求められている。そのため、高等学校段階でも授業の UD を取り入れた授業をしていくことが必要と考える。授業の UD を効果的にするために重要なことは、2 点ある。1 点目は、生徒の実態把握を授業実践前、授業実践中にすることの重要性である。授業実践前では、実践研究Ⅱ、Ⅲにおいて定期テストなどに基づいた学力面の把握をした。授業実践中では、目標達成課題を基に生徒の習得状況の把握をした。これにより、授業設計や授業内の個別支援を効果的に行えた。2 点目は、授業の UD による全体の支援をしつつ、目標達成課題や単元テストなどのデータを基にして、より手厚い支援が必要な子どもを早期に見つけ、多層指導モデル MIM (Multilayer Instruction Model) のような補助的な指導を行っていくことが重要である。

今後は、授業の UD の視点を取り入れた学習指導の工夫や支援の実践をさらに蓄積し、学校教育現場におけるより効果的な学習指導の工夫を開発していくことが求められる。